

浄瑠璃「ゑぼし折」の諸版と展開

鳥居 フミ子

はじめに

浄瑠璃「ゑぼし折」は他の浄瑠璃に比べて比較にならないほど多くの正本が現存している。版元は山本九兵衛、正本屋仁兵衛、象牙屋三郎兵衛をはじめ二十軒におよび、版式は八行本、七行本、十行本、十・十一行本、十四行本、絵入本とあって、多様である。所属太夫は義太夫、筑後掾、土佐掾の三種があり、所属太夫によって内容にも相異がある。本稿では現存する浄瑠璃「ゑぼし折」の諸版の系列を考えながら「ゑぼし折」の展開を考えてみたいと思う。

「ゑぼし折」の諸版の系列については従来二つの考え方があった。

その一つは、黒木勘蔵氏が日本名著全集『近松名作集』上（大正十五年）の「源氏烏帽子折」の解題で示されたものである。この解題では「源氏烏帽子折」の版式の異なるものは七種類あり、⁽¹⁾原形は山本土佐掾正本で、元禄三年正月竹本座上場と考定される竹本義太夫の正本「烏帽子折」は土佐掾正本の五段めを改めたものであるとしている。その後、高橋宏氏はこの考えを発展し、山本角太夫正本三種・山本土佐掾正本一種・竹本義太夫正本一種・竹本筑後掾正本三種および絵入十四行本をあげ、「角太夫正本が初演本、義太夫正本、土佐掾正本が改訂本ということになる」とした。高橋氏は黒木氏が「山本土佐掾正本が原形であろう」とした三種の正本は、山本角太夫正本であったと説明し

たのである。⁽²⁾

このように、黒木勘蔵氏や高橋宏氏は角太夫正本（土佐掾正本）を初演時のものとし、義太夫正本を改訂本として「ゑぼし折」正本の伝系を説明したのである。しかし、何によってこのような諸版の系列を考えたのか、その根拠については両者とも不明確である。また、高橋氏の言っている角太夫正本と土佐掾正本の区別についても不明である。土佐掾正本は現存しているが、角太夫正本と明記された正本の存在は報告されていないのである。

これに対して、「ゑぼし折」の初演は元禄三年正月竹本義太夫によって行われ、「ゑぼし折」正本は竹本義太夫正本が祖本であるとする考え方がある。藤井乙男氏『近松全集』第三卷（朝日新聞社 大正十四年）所収「烏帽子折」解題の見解である。（本稿中『近松全集』は本書を指す。）藤井氏は、八行五十四丁山本九兵衛板竹本義太夫正本をあげ、これを義太夫による初演時の正本とし、筑後掾正本・土佐掾正本はこの改訂本としている。ただし、この場合、筑後掾正本と土佐掾正本とは節付けに至るまで全く同内容としているのは藤井氏の誤記であったと思われる。両者の相異は節付けの点でも内容の点でも明白であったはずである。

信多純一氏「山本角太夫について」（古典文庫『古浄瑠璃集 角太夫正本（一）』）では、藤井乙男氏の見解を発展し、内容の上から義太夫正本を祖本とし、筑後掾正本・土佐掾正本はそれぞれ義太夫正本の改訂版としている。

「ゑぼし折」諸版の系列は、結論的というならば後者の見解に従うのが妥当であろう。すなわち、義太夫正本を祖本とし、筑後掾正本・土佐掾正本は改訂版として版行されたと考えるべきである。この関係を次のように図式化することができる。

甲

乙

竹本義太夫正本 — 竹本筑後掾正本 — 山本土佐掾正本

一 諸版と系列

「ゑぼし折」正本を所属太夫別にあげて、その書誌を記す。次の書式による。

奥書 『近松浄瑠璃本奥書集覧（正本近松全集別巻一）』（勉誠社昭和五十五年）の番号による。

寸法 糰により、縦×横の順に記す。

甲 竹本義太夫・筑後掾正本

一 八行五十四丁 『近松全集』第三巻底本 竹本義太夫正本

装幀 献上本 原表紙

題簽 原題簽「ゑぼし折」竹本義太夫
直傳 中央

内題 烏帽子折

行数 八行 丁数 五十四丁

段数 五段

板心・板外 不明

奥書 『近松全集』の翻刻によれば、文面は「集覧八一」と同じである。ただし、作者名に「近松門左衛門信盛」とあるが、このような奥書の例はないので、作者名の下に「信盛」印の文字が翻字されたものと解される。

板元 山本九兵衛

印記 「文楽座蔵」長方形印、他に円形印一

備考 右の書誌は『近松全集』解題および同書掲載の図版によったものである。

藤井乙男著『江戸文学叢説』（岩波書店 昭和六年）に本正本についての紹介がある。

二 絵入十七行十四丁半

1 慶応義塾大学附属図書館蔵本 竹本義太夫正本

装幀 替表紙 薄茶色無地 替糸 二一・七×一六・三

題簽 替題簽「源氏ゑぼしをり 竹本義太夫正本」 中央 一五・七×三・二

内題 源氏ゑぼしをり 竹本義太夫正本

行数 十七行 丁数 十四丁半 段数 五段

匡郭 四周单边 二〇・二×一五・一

板心 普通型の魚尾模様 上部に「ゑぼし折」、下部に丁付「三〇十六、□（裁断のため不明。表のみ裏表紙見返しに貼付）」

挿絵 見開き三図、片面二図。四2丁ウ・五3丁オ、七5丁オ、九7丁ウ・十8丁オ、十二10丁オ、十五13丁ウ・十六14丁オ（漢数字は原丁付、洋数字は実丁数を示す。以下これに準ずる。）

絵師 不明

刊記 終丁の本文末に、

二條通寺町西入北側 大坂かうらいばし
板元 山本九兵衛 さかひ筋かど出見せ 山本九兵衛板

印記 「慶應義塾圖書館」長方形朱印

備考 匡郭外上部に次のような節事の指示がある。

行道 (六四ウ)

折帽烏 (十一九ウ)

曆柱 (十六四ウ)

本書の詞章は八行五十四丁竹本義太夫正本「ゑぼし折」と基本的には同文で、多少の誤刻と細部の相違が認められる。ただし、各段冒頭に古浄瑠璃の形式句を加え、道行や節事の題を省略して該当箇所を匡郭外に、前記のような指示を記している。

2 大阪府立中之島図書館蔵本 竹本義太夫正本

装幀 替表紙 藍色 替糸 二一・六×一六・四

題簽 欠

内題 源氏ゑぼしをり 正本

行数 十七行 丁数 十四丁半 段数 五段

匡郭 四周单边 二〇・三×一四・八

板心・挿絵 「二一」に同じ

刊記 終丁の本文末に、

亥ノ七月吉日 武藤三右衛門板

板元 武藤三右衛門

備考 本書の刊行は、刊記に「亥」とあるので元禄八年と考えられる。

本書は「二―1」(慶応義塾大学附属図書館蔵本)の覆刻本である。覆刻に当り、内題下の太夫名を削り、巻末の版元名を彫り替え、匡郭外の節事の指示の中、「烏帽子折」を「けんじ」(六4ウ)とし、「柱暦」をつぶして「▲」(十六14ウ)にしている。また、挿絵は同じであるが、九7丁ウ・十8丁オだけがやや異っている。すなわち、烏帽子屋の店先の図の下部に、慶応義塾大学附属図書館蔵本では人物の顔と、上方にむけた足が見えているが、本書ではこれを削っている。

三八行五十二丁 天理図書館蔵 竹本筑後掾正本

装幀 献上本 原表紙 紺色無地 替糸 二五・八×一九・七

題簽 替題簽「烏帽子折」 中央 二二・四×四・六

内題 烏帽子折

行数 八行 丁数 五十二丁 段数 五段

字高 一九・三×一三・七

板心 各段首丁の板心上部に陽刻で段数標示 ㊟(十三丁め)㊢(二十四丁め)㊣(三十六丁め)㊤(四十五丁め)

板外 ㊟㊢㊣㊤(以下「牛若宮めぐり」の四丁分に板外なし) ㊟五十二^カ

奥書 〔集覧二五―三〕「竹本筑後掾」に茶壺印と朱角印、「山本九右衛門」に朱長方形印(他はなし)

板元 山本九兵衛・山本九右衛門

印記 「水落文庫」長方形朱印他朱印二、「但州／中屋甚右衛門／湯嶋」円形黒印

備考 本書は「二」(竹本義太夫正本八行五十四丁本 山本九兵衛板)の改訂版で、第五の「はしらごよみ」を「牛

「若宮めぐり」に改めたものである。『近松全集』第三卷所収本「一」の初丁表の写真は本書の初丁表と全く同じである。したがって、改訂された「牛若宮めぐり」以外の箇所は「一」と同版と考えられる。本書の「牛若宮めぐり」の節事の丁だけに板外がないのは、この丁だけを改刻して挿入したためと考えられる。

本書は筑後掾による再演時の正本である。筑後掾受領は元禄十一年正月であるから、本書の刊行はこれ以後である。筑後掾による再演の時は明らかでない。『外題年鑑』明和版に「源氏烏帽子折二度目元禄十二己卯年正月二日」とあり、根拠は明らかでないがおおよそこの頃と考えてよいように思われる。

四 八行四十丁

『近松全集』第三卷に紹介されている。

日本名著全集『近松名作集』上の底本。

原本の所在不明。

五 七行七十二丁 東京大学教養学部国文学研究室蔵

装幀 原表紙 柿色無地 原糸 一二・九×一五・九

題簽 原題簽「ゑぼし折」 竹本筑後掾
正本屋仁兵衛板 中央 一五・九×四・一

内題 ゑぼし折

行数 七行 丁数 七十二丁 段数 五段 字高 一九・七×二三・五

板心 上部に「ゑ」、下部に丁付「一」七十二。各段首丁の板心中央部に陽刻で段数標示○(十八丁め) ○(三十

四丁め) ④(五十丁め) ⑤(六十三丁め)

板外 なし

奥書 [集覧四四]




板元 正本屋仁兵衛

印記 「黒本文庫」長方形朱印、他に長方形黒印一

六十行三十三丁

1 旧赤本文庫蔵本


装幀 原表紙 麻葉繫紋空押 藍色 原糸 二三・一×一六・〇

題簽 原題簽「紋 ゑほし折 竹本椽」中央 一七・八×三・六

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十三丁 段数 五段

字高 一八・五×一四・一

板心 各丁の上部に「ゑぼし」、下部に丁付「一〇卅二」。各段首丁の板心上部に陽刻で段数標示 ①(二丁め)

②(九丁め) ③(十六丁めに第三の標示なし) ④(二十三丁め) ⑤(二十九丁め)

板外 なし

奥書 [集覧一八一二]

板元 本屋仁兵衛

2 大東急記念文庫蔵本

装幀 原表紙 麻葉胡蝶紋空押 紺色 原糸 二一・八×一五・七

題簽 手擦れのため「折」だけが見える。あとは痕跡のみ。

内題 源氏ゑぼしをり

行数 十行 丁数三十三丁 段数 五段

字高 一八・四×一四・八

板心 各丁の上部に「ゑぼし」(一、四、六、九、十三、十八、二十、二十三、二十七、三十)、「ときは」(一、十、二、十一)、「みやめくり」(一、三十一、三十二、三十三)、「ゑぼし」(上記以外の丁)、下部に丁付「一、九、一(ときは御ぜん道行の丁)、二(同上)、十二、三十、一(みやめくりの丁)、二(同上)、三(同上)。各段首丁の板心上部に陽刻で段数標示①(二丁め)②(九丁め)③(十六丁めに第三の標示なし)④(二十三丁め)⑤(二十九丁め)

板外 なし

奥書 〔集覧二一—二〕

板元 正本屋七兵衛・正本屋喜右衛門

印記 「久原文庫」の長方形朱印を押した白紙を表紙見返しに貼付

3 東京大学教養学部国文学研究室蔵本

装幀 原表紙 紺色無地 替糸 二一・七×一五・五

題簽 替題簽「源氏ゑぼし折 全」中央 一七・五×三・六

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十三丁 段数 五段

字高 一五・一×一三・九

板心 なし

板外 ゑぼし ゑぼし三十三

奥書 〔集覧二五―三〕

板元 山本九兵衛・山本九右衛門

4 文楽協会蔵本

装幀 原表紙 藍色無地 原糸（一部替糸にて補修） 二二・六×一五・八

題簽 原題簽「紋 ゑぼし折 竹本筑後掾 直傳」 中央 一八・六×三・二

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十三丁 段数 五段

字高 一八・二×一三・八

板心 曲尾三丁分の板心上部に「ゑぼしみやめくり」、下部に丁付「三十一」三十三とある以外は「六―二」と同じ

板外 なし

奥書 〔集覧四二〕

板元 象牙屋三郎兵衛^カ

印記 「豊竹／山城／少掾」朱角印、「松／更」方形朱印、他に円形黒印二種

5 都立中央図書館蔵本

装幀 替表紙 藍色無地 替糸 二一・八×一六・〇

題簽 原題簽「ゑほし折 山本土佐掾直之正本」 中央 一六・〇×四・二

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十三丁 段数 五段

字高 一八・三×一四・一

板心・板外 「六一・二」(大東急記念文庫蔵本)と同じ

奥書 「集覽二〇二―二」

板元 京 鶴屋喜右衛門・江戸 鶴屋喜右衛門

印記 「加賀文庫」長方形朱印

備考 本書は「六一・二」と同版である。すなわち、内容も節付けも筑後掾のものである。題簽に「山本土佐掾直之正本」とあるのは本文と矛盾している。別本の表紙が綴じられたものと考えられる。一見して、原表紙のようであるが、替表紙の改装本と判断される。

同版が国立台湾大学にある。替表紙黒色無地 二一・七×一五・五、題簽欠 字高一八・三×一四・〇 替表紙で題簽がないために都立中央図書館蔵本の題簽の疑問を確かめることはできない。

6 天理図書館蔵本

装幀 替表紙 灰色無地 替糸 二一・八×一五・七

題簽 替題簽「烏帽子折」 中央 一六・四×三・四

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十三丁 段数 五段

字高 一八・三×一四・一

板心・板外 「六一二」(大東急記念文庫蔵本)と同じ

奥書 [集覧一〇三]

板元 江戸 鶴屋喜右衛門・京 鶴屋喜右衛門

印記 「斑山／文庫」方形朱印、「高ノ／蔵書」円形朱印

備考 天理に同版の別本がある。原表紙 紺色無地 印記「藤井／氏」朱角印

また、同版がソウル大学校中央図書館にある。原表紙 紺色無地 題簽欠

この版(六一六)は仁兵衛版(六一一)に比べると、同版であるが字高(縦)が約四耗縮んでいる。後刷本と考えられる。

7 東京大学教養学部図書館蔵本

装幀 替表紙 白色無地 替糸 三一・九×一五・七

題簽 欠 「源氏烏帽子折」と表紙中央に墨書

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十三丁 段数 五段

字高 一八・四×一三・九

板心・板外 「六一一」と同様であるが、板心上部の文字と丁付が異なる。「ゑぼし」……一、四、九、十一、十三、

十四、十七、二十、二十一、二十七、三十、三十二丁。「ゑぼし」……上記以外の丁。丁付「二、十九、揃二
十（ゑぼし折名づくし）、揃廿一（ゑぼし折名づくし）、廿二、三十、宮卅一（牛若宮めぐり）、宮卅二（牛若
宮めぐり）、卅三」

奥書 欠

板元 不明

印記 「木谷蓬／吟文庫」長方形朱印、他に朱印一

七 十行三十二丁 早稲田大学演劇博物館蔵

装幀 原表紙（裏表紙のみ残存） 紺色無地 覆表紙（薄茶色） 二三・一×一五・九

題簽 替題簽「近松作 源氏ゑぼし折」 中央 一四・一×三・九

内題 源氏ゑぼし折

行数 十行 丁数 三十二丁 段数 五段

字高 一九・一×一三・一

板心 上部に「ゑぼし」、下部に丁付「二、十九、三十、□」

板外 なし

奥書 「集覽二〇九—二」

板元 不明

印記 「伊原／氏印」方形朱印、「日報社蔵本」長方形朱印、「演劇／博物館／圖書」方形朱印

八 十四行十五丁半 『近松全集』第三卷解説に紹介 原本の所在不明

『近松全集』第三卷の解説によれば、巻末に「于時宝永七年かのへとらノ三月吉祥日 板元亀屋」とある。

九 絵入十六行十丁 東京大学総合図書館霞亭文庫蔵

装幀 替表紙 赤茶色無地 替糸 一八・〇×一二・九

題簽 欠 「近松門左衛門作／源氏烏帽子折 全」と左肩に墨書

内題 なし 内題の位置に「げんじゑぼしをり」と墨書

行数 十六行 丁数 十丁 段数 六段

匡郭 四周单边 一五・一×二一・七

板心 上部に「ゑ」、下部に丁付「二」四、五ノ七、八ノ十二

挿絵 見開き三図 一ウ・二2オ、四4ウ・五ノ七5オ、十8ウ・十一9オ

絵師 不明

刊記 終丁裏本文末に「正月吉日 江戸大てんま丁／うろこかたや孫兵衛」

板元 うろこがたや孫兵衛

印記 「林_忠」円形朱印、「霞亭／文庫」方形朱印

備考 刊年は挿絵の絵柄から元禄中期と考えられる。

本書は筑後掾正本「ゑぼし折（源氏ゑぼしをり・げんじゑぼしをり）」を六段に分けて絵入本にしたものである。段構成は、筑後掾正本に対応しているが、筑後掾正本の三段めを前後の二つに分けて三たため・四た

めとして六段構成にしている。すなわち、三段めの五郎太夫が義経を密告するために六原へ走るところまでを三たんめとし、以下を四たんめとし、そのあとは順を追って第四は五たんめ、第五は六たんめとしている。ただし、第一・第二は、それぞれ初段（破損のため段名は不明）・二たんめに対応しているが、第一の結末、常盤を義朝の墓所へ引いていくところから本書では二たんめになっている点がやや異なっている。

本書の内容をみると、道行や節事の題が削除されているのは絵入本の性格上当然であるが、詞章は筑後掾正本の詞章に準拠しながら、これを著しく省略している。例えば、「ときは御ぜん道行」は道中の描写はほとんどなく、「ゑぼし折名づくし」「牛若宮めぐり」なども極めて簡略化されている。

本書は太夫によって語られたものではなく、江戸の絵入六段本風の読みものとして編纂されたものと考えられる。本書の板元うろこがた屋孫兵衛は寛文より元禄にかけて全平本をはじめとして多くの絵入六段本を刊行した有名な江戸の書肆である。読み物とした場合、筋に関係のない節事の箇所が特に簡略化されるのは当然の現象である。

本書の挿絵は見開き三図とも『近松全集』第三卷「烏帽子折」本文中に掲載されている。

乙 山本土佐掾正本

一〇 十行二十五丁

1 山口大学附属図書館蔵本

装幀 原表紙 藍色無地 原糸 二一・八×一五・七

題簽 原題簽「ゑほし折 山本土佐掾 直傳」 中央 一八・二×三・五
内題 源氏ゑぼしおり

行数 十行 丁数 二十五丁 段数 五段

字高 一九・五×一三・八

板心 各段首丁の板心上部に陽刻で段数標示 ㊶(七丁め) ㊷(十三丁め) ㊸(十九丁め) ㊹(第五の首丁△二十三丁め) 板心には段数標示なし

板外 ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

奥書 〔集覧八六〕

板元 京 菱屋治兵衛

2 信多純一氏蔵本

装幀 原表紙 藍色無地 替糸^カ 二二・四×一五・五

題簽 欠 「源氏ゑぼしおり」と表紙中央に墨書

字高 一九・七×一三・八

奥書 〔集覧一〇五—一二〕

板元 京 菊屋七郎兵衛

内題・行数・丁数・段数・板心・板外は「二〇—1」(山口大学附属図書館蔵本)に同じ。

3 大阪大学附属図書館蔵本

装幀 替表紙 紺色無地 替糸 二二・〇×一五・九

題簽 欠

字高 一九・三×一三・一

奥書 〔集覽八五―二〕

板元 山本九兵衛

内題・行数・丁数・段数・板心・板外は「二〇―一」(山口大学附属図書館蔵本)に同じ。

4 大東急記念文庫蔵本

装幀 原表紙 藍色無地 替糸 二・四×一五・二

題簽 原題簽「ゑぼし折 山本土佐掾直傳」 中央 一六・九×三・八

字高 一九・六×一三・九

奥書 〔集覽二〇―二三〕

板元 山本九兵衛

印記 「久原文庫」長方形朱印

内題・行数・丁数・段数・板心・板外は「二〇―一」(山口大学附属図書館蔵本)に同じ。

備考 同版が実践女子大学附属図書館にある。

一一 十行三十丁

1 東洋文庫蔵本

装幀 原表紙 紺色無地 替糸 二二・〇×一六・一

題簽 替題簽「げんじゑぼしおり」 中央 一一・五×四・二

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十丁 段数 五段

字高 一九・〇×一三・九

板心 なし

板外 不明

奥書 「集覽一九」 ただし、異版の奥書がついていると考えられる。

板元 本屋平兵衛^カ

印記 「霞亭文庫」 長方形朱印

備考 本書の本文は詞章・節譜ともに土佐掾のものである。奥書は他書の奥書がつけられたものと判断される。したがって、奥書に「竹本筑後掾」とあることによって筑後掾正本とするのは誤りである。

2 東京国立博物館蔵本

装幀 替表紙 茶色無地 替糸 二二・〇×一六・三

題簽 欠 左肩に「げんじゑぼしをり」と墨書

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十丁 段数 五段

字高 一九・四×一四・〇

板心 なし

板外 各丁の裏、左下部に「ゑほし」
「ゑほし三十」

奥書 「集覽九七」一二

板元 吉文字屋清兵衛

印記 「鷺田」鉞形朱印、「徳川宗敬氏寄贈」長方形朱印

備考 奥書に「山本土佐掾」とある。

3 信多純一氏蔵本

装幀 替表紙 こげ茶色無地 替糸 二二・〇×一五・九

題簽 欠

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十丁 段数 五段

板心 なし

板外 各丁の裏、左下部に「ゑほし」
「ゑほし三十」

奥書 「集覽一〇七」

板元 京 谷村清兵衛

4 東京芸術大学附属図書館蔵本

装幀 原表紙 紺色麻葉繫紋空押 二二・四×一六・〇

題簽 原題簽「ゑぼし折」
直傳 中央 一七・六×三・八

内題 げんじゑぼしをり

行数 十行 丁数 三十丁 段数 五段

字高 一九・〇×一三・八

板心 上部に「ゑほし折」、下部に丁付「□、二、十九、卅、四十」

板外 なし

奥書 〔集覧二〇一一〕

板元 山木九兵衛

備考 本書は十五丁め落丁のため実丁数は二十九丁である。

本書は「2―1」「2」「3」と同版であるが、板心・板外だけが異なっている。

同版が実践女子大学附属図書館（守随憲治氏旧蔵）・早稲田大学演劇博物館・関西大学附属図書館・上田市立図書館花月文庫にある。四本とも替表紙・替題簽で奥書を欠く。

土佐掾正本の十行二十五丁本と十行三十丁本の詞章は同じである。

一二 十行三十六丁 抱谷文庫（大久保忠国氏）蔵

装幀 替表紙 藍色無地 替糸 二二・四×一六・四

題簽 欠

内題 ゑほしをり 大夫直之正本

行数 十行 丁数 三十六丁 段数 五段

字高 一九・八×一四・五

板心 なし

板外 ゑほし 一 ゝ ゑほし 卅六

奥書 〔集覧三六―四〕と同じ文面であるが「竹本筑後掾」が削除されている。

奥書の字高 一七・七×一〇・六

板元 大坂 象牙屋三郎兵衛

備考 三十五丁めが破損している。

一三 十・十二行二十四丁

1 東京大学教養学部国文学研究室蔵本

装幀 替表紙 灰色無地 替糸 二二・〇×一五・八

題簽 替題簽「ゑほし折 山本土佐掾直傳」左肩貼付 一八・一×三・三

内題 源氏ゑぼしおり 太夫正本

行数 十・十一行（十行……一丁）十七丁オ、十一行……十七丁ウ（二十四丁ウ）

丁数 二十四丁 段数 五段

字高 一九・六×一三・七

板心 各段首丁の板心上部に陽刻で段数標示 ㊶（七丁め）㊷（十二丁め）㊸（十八丁め）㊹（二十二丁め）

板外 ゑ 卅 了

奥書 〔集覧一二二〕

板元 京 八文字屋八左衛門

印記 「黒本文庫」「永田文庫」長方形朱印

2 抱谷文庫蔵本

装幀 原表紙 紺色（麻葉繫紋空押らしいが手ずれのため不明） 二二・五×一五・五

題簽 替題簽「ゑほし折」 中央 一七・二×三・八

字高 一九・八×一三・八

奥書 〔集覧一〇五―三〕

板元 京 菊屋七郎兵衛

内題・行数・丁数・段数・板心・板外 「二三―一」（東京大学教養学部国文学研究室蔵本）に同じ。

十・十一行本の詞章は、十行二十五丁本、十行三十丁本の詞章とは細部において相異があり、節付けもやや異っている。

『東大近松丸本目録』に、十・十一行二十三丁 八文字屋八左衛門板 山本土佐掾直伝「源氏ゑほしをり」（題簽「ゑほし折」）があげられているが、東京大学教養学部国文学研究室には現存していない。十・十一行二十四丁本の誤記ではないかと思われる。

一四 十行三十二丁 東京大学教養学部国文学研究室蔵

装幀 替表紙 藍色無地 替糸 二一・六×一五・八

題簽 替題簽「ゑぼし折 全」 中央 一七・四×三・六

内題 ゑぼしおり 太夫正本

行数 十行

丁数 三十二丁 ただし、卷末の一丁八行分は補写、その後の半丁二行分は白紙のため、実丁数は三十丁で終わっている。

段数 五段

字高 二〇・二×一四・一

板心 第二の首丁上部に陽刻で段数標示 ㊦（十丁め）、他の段は段数標示なし。

板外 十丁めにおり十と見えている。他の丁は裁断のため不明（縦線のみが見えている）。

奥書 欠

板元 不明

印記 「黒本文庫」長方形朱印

備考 本書は十行三十二丁本であるが、卷末二丁分が補写と白紙になっている。破本である。

本書は土佐掾正本であるが、他の土佐掾正本に比べて独特である。破本のため全体を比較することはできないが、特に次の三点に注目される。

- 1 内題が「ゑぼしをり」となっている。他の土佐掾正本にはこの内題はない。
- 2 第二の冒頭が「かくてそのうち」となっている。土佐掾正本のうち、この冒頭は本書のみである。
- 3 詞章の異同が多い。省略があり、細部においては筑後掾正本と同じ表現もある。

一五 絵入十八行十二丁半 森修氏蔵

信多純一氏「山本角太夫について」(古典文庫『古浄瑠璃集 角太夫正本』)に紹介されている。これによれば書誌は次のようである。

題簽 原題簽 上部に横書で「新板」とあり、中央に「烏帽子折」と大きく記され、その右に「げんじゑほしをり」、

左に「ときは御ぜん道行太夫直之正本」、下段に「ふ屋町通／八文字屋／八左衛門」とある。

内題 源氏ゑほしをり^カ

行数 十八行 丁数 十一丁半 段数 五段

板心・板外 未詳

刊記 終丁本文末に「京ふや町通せ いぐはんじ 下ル町 八文字屋八左衛門新板」とあるらしい。

板元 京 八文字屋八左衛門

備考 信多氏の紹介によれば、節付けにより山本角太夫正本と認められる。

一六 十行三十五丁 所在不明

高橋宏氏「近松と山本角太夫」(『演劇史研究Ⅰ元禄劇篇』(昭和21年 京橋巧芸社)所収)に掲げられている。

高橋氏の紹介によれば、鶴屋喜右衛門板 山本土佐掾正本である。詳細は不明。

高橋宏氏右論文には、十行二十四丁山本角太夫正本として「げんじゑほしをり」「源氏ゑほし折」の二種の正本が掲げられている。この二本はともに現存しない。十・十一行二十四丁山本土佐掾正本(諸版二三)の略

記ではないかと考えられる。

なお、次のような現行文弥節台本（写本）が報告されている。⁽³⁾

。七行五十九丁 鹿児島県薩摩郡東郷町 野久尾親氏蔵

装幀 和装（仮綴） 袋綴 一六・二×二〇・〇

内題 不明

行数 七行 丁数 五十九丁

備考 一行二〇字、二十六字。一筆書写。書写者・書写年代ともに不明。本文右脇に語り・三味線の譜号・記号が施されている。

以上、管見に入った「ゑぼし折」の諸版をあげた。別表にも明らかなように、「ゑぼし折」の版型は十六種類をあげることができる。同版で奥書の異なるものを数えあげれば二十九種に及んでいる。他の浄瑠璃に比べて極めて多種多様の版が版行されているのである。「ゑぼし折」がいかに人気の高い出しものであったかを物語っている。

義太夫正本は、八行五十四丁本（山本九兵衛板）と絵入十七行十四丁半本（山本九兵衛板・武藤三右衛門板）の二種である。まず、義太夫による初演の際に山本九兵衛から八行本が版行され、これが浄瑠璃「ゑぼし折」の祖本となったと考えられる。山本九兵衛板の絵入本は、八行本義太夫正本の詞章に基づき、絵入本としての体裁を整えて版行したものである。すなわち、各段冒頭に古浄瑠璃の形式句、扱も其後（一段め）、扱其後（二段め）、去程に（三段め）、かくて其後（四段め）、其後（五段め）をおき、節事の題を削って匡郭上に節事を指示する語を記し、挿絵を加えて絵

入本としたのである。この山本板の絵入本の版を使って、挿絵や匡郭外の節事の指示にやや手を加えたのが武藤三右衛門板の絵入本である。

筑後掾正本は、八行本、七行本、十行本、絵入本など多くの種類があるが、山本九兵衛板八行本義太夫正本の板木を利用して、山本九兵衛・山本九右衛門板八行五十二丁本（諸版三）が生まれ、これが筑後掾正本の祖型となったと考えられる。八行本は、義太夫正本、筑後掾正本ともに山本板で、他の書肆からは出されなかったものと思われる。また、山本九兵衛・山本九右衛門は、この筑後掾正本八行本と同じ奥書をつけて、十行三十三丁本を版行している。この十行三十三丁本は、別表にも明らかなように、同じ版を使い、奥書だけをかえて多くの版元から版行されている。筑後掾正本「ゑぼし折」の中で広く一般に親しまれた普及版である。

絵入十六行十丁本は、元来五段であったものを、当時江戸で流行していた絵入六段本にして版行したものである。

土佐掾正本には稽古本の古い形態である八行本がない。十行二十五丁本と十行三十丁本が一般に流布した版型である。さらに、土佐掾正本には筑後掾正本には見られない十・十一行とりまぜ本が二種類、八文字屋八左衛門と菊屋七郎兵衛によって版行されている。

次に、土佐掾正本には山本板がなくて山本板が三種類も見られることが注目される。「ゑぼし折」の祖本として義太夫の初演時に八行本を版行し、さらに筑後掾再演時に八行本を版行した山本九兵衛は、土佐掾による改作は版行しなかったものと考えられる。山本九兵衛は、近世初頭から多くの浄瑠璃正本の版行を手がけてきた老舗で、同じ京の地で活躍していた山本角太夫（土佐掾）の正本も数多く版行している。代表的なものをあげれば、次のような正本がある。

。凱陣八島 十行三十二丁 大倉集古館蔵 奥書に山本角太夫とある。

融通大念仏 十行四十一丁 大東急記念文庫蔵 内題下・奥書に山本土佐掾とある。
勅稚高麗責 十行三十二丁 旧古鞆文庫蔵 奥書に山本土佐掾とある。

このような状況でありながら土佐掾の「ゑぼし折」に山本板が見られないのは、書肆山本の姿勢であったとも受けとることができるように思われる。山本は、義太夫直の正本・筑後掾直の正本の「ゑぼし折」を祖型として尊重していたのである。そのために、筑後掾の「ゑぼし折」を大幅に改作した土佐掾正本の版行はあえて手がけなかったのではなからうか。偽版の顰蹙を買った山本板に土佐掾正本が三種類（一〇―3・4、一一―4）も見られるのは、山本板の出版されなかったことの逆の理由のようにも思われる。

このように土佐掾正本は古態の八行本がなく、正本としては新しい形態の普及版十行本が主体であり、十・十一行本も見られることなどから、山本板八行本筑後掾正本より後のものと考えるのが妥当のように思われる。

「ゑぼし折」は、従来近松作かとされ、多くの近松浄瑠璃集にも収められている。しかし、本曲を近松作とする確証をあげることはいできない。諸正本の内題下に作者近松門左衛門の署名のあるものは一本も見当たらないのである。近松は貞享三年七月上演の「佐々木大鑑」から正本の内題下に作者としての名を記すようになる。⁽⁴⁾「ゑぼし折」の初演は後で述べるように元禄三年正月は確実と考えられるので、もし本曲が近松作であるならば、当然その正本の内題下に署名があつて然るべきである。しかし、「ゑぼし折」諸版には、内題下に作者近松門左衛門と記されているものは見当たらないのである。

これに対して、奥書に近松門左衛門の名が見られるものがある。諸版「一」「三」の八行本と「六―3」の十行本の三種で、何れも山本板である。就中『近松全集』に翻刻された「一」の奥書には近松門左衛門の下に「信盛」印と花押があり、奥書の版式としては整ったものである。このことは、「ゑぼし折」を近松作とする有力な条件となるであろう。

う。

ここで、浄瑠璃「ゑぼし折」の呼称について考えておきたい。「ゑぼし折」の題名については、従来、初演本を「烏帽子折」、改訂本を「源氏烏帽子折」とするのが一般的な表記であったが、両者の関係は単純ではないようである。

原題簽残存の正本をみると、所属太夫や版式の如何にかかわらず外題は「ゑぼし折」（絵入十八行十一丁半土佐掾正本のみ〈烏帽子折〉）とあるのが普通である。浄瑠璃正本の外題と内題が異なる場合、外題が通称を示すのが通例である。⁽⁵⁾ 本曲も外題の「ゑぼし折」が一貫した通称であったと考えるべきであろう。したがって、改訂本を「源氏烏帽子折」とする通説は改められるべきである。この「ゑぼし折」の題名は、先行の幸若や謡曲の題名とも一致するものである。山本板八行本は義太夫正本・筑後掾正本ともに外題・内題のすべてに「ゑぼし折（烏帽子折）」と記されている。本曲は「ゑぼし折」の名で親しまれ、筑後掾による改訂の際も、土佐掾による改作の際にも「源氏烏帽子折」という呼び方はされていないのである。

「源氏ゑぼしをり」という呼称は、義太夫による初演時の内容を伝える絵入十七行十四丁半本（山本九兵衛板）の内題にはじめてみられるものである。絵入本は挿絵を加えることによって、浄瑠璃の内容を伝える読みものとして売り出されたものである。「ゑぼし折」という題名の上に「源氏」の名を冠して幸若舞や謡曲と違った浄瑠璃「ゑぼし折」であることを明確に示そうとしたのであろう。牛若の苦渋に満ちた幼少年時代は、左折の烏帽子による元服を契機として源氏旗上げの機連へとつながっていく。牛若の烏帽子折は祝福すべき源氏旗上げに直結するものである。源氏の御曹子牛若の烏帽子折は、まさに源氏烏帽子折と呼ぶにふさわしい慶事である。このような理由から「源氏ゑぼしをり」の呼称は歓迎されたのであろう。山本板絵入十七行半本の後、「ゑぼし折」の正本は内題に「源氏ゑぼしをり」と記されるのが普通となったものと思われる。外題を「ゑぼし折」とし、さらに一曲の内容を示す「源氏ゑぼしをり」

を内題に記すようになったのである。

なお、この内題「源氏ゑぼしをり」の表記は一定せず、左のようになっていゝることに注目しておきたい。

源氏ゑぼしをり 絵入十七行十四丁半 義太夫正本（山本板・武藤板）

〃 十行三十三丁 筑後掾正本（正本屋七兵衛・正本屋喜右衛門板）

〃 絵入十八行十二丁半 土佐掾正本（八文字屋板）

源氏ゑぼし折 十行三十一丁 筑後掾正本（板元不明）

げんじゑぼしをり 十行三十三丁 筑後掾正本（仁兵衛板・両山本板）

源氏ゑぼしおり 十行二十五丁 土佐掾正本（菱屋板・菊屋板・山木板）

〃 十・十一行二十四丁 土佐掾正本（八文字屋板・菊屋板）

後世一般に本曲を「源氏烏帽子折」と漢字で記しているが、そのような表記は諸版の外題・内題の何れにも見られない。「源氏烏帽子折」と記すのは正本に即さない誤記であつたとせざるを得ないようである。正本に初出の表記を尊重するならば、「源氏ゑぼしをり」と記されるべきであらう。

〔ゑほし折正本一覧〕

甲 竹本義太夫・筑後掾正本

	一	二	三	四	五	六	七	八	九
	八行五十四丁	1 絵入十七行十四丁半 2	八行五十二丁	八行四十丁	七行七十二丁	1 十行三十三丁 2	3	4	5
	ゑほし折	欠	欠	不明	ゑほし折	ゑほし折	欠	欠	欠
外題	烏帽子折	源氏ゑほしをり	源氏ゑほしをり	烏帽子折	不明	ゑほし折	げんじゑほしをり	源氏ゑほしをり	不明
内題	義太夫	〃	〃	筑後掾	〃	〃	〃	〃	〃
板元	山本九兵衛	山本九兵衛	武藤三右衛門	山本九兵衛・九右衛門	不明	正本屋仁兵衛	正本屋七兵衛	正本屋喜右衛門	山本九兵衛・九右衛門
奥書	八十一カ	二五―三	不明	四四	一八―二	二一―二	二五―三	四二	一〇二―一
刊年	元禄三年カ	元禄三年頃	元禄八年カ	元禄十一年以後	不明	不明	一〇九―一二	不明	宝永七年
所在	全集三（底本）	慶大	大阪府	天理	全集三（解説）	東大教養研	赤木	大東急	東大教養研
備考	山城少掾旧蔵本は同版か。	本文末に「亥七月吉日」とある。	名著全集「近松名作集」上」の底本。	都立本には土佐掾の題簽があるが、本文は筑後掾である。	六段本	東大図霞	全集三（解説）	早大演	東大図霞

乙 山本土佐據正本

外題	内題	太夫	板元	奥書	刊年	所在	備考
あほし折	源氏あほしおり	土佐據	菱屋治兵衛	八六		山口大	
欠	〃	〃	京 菊屋七郎兵衛	一〇五―二		信多	
欠	〃	〃	山木九兵衛	八五―二		阪大	
欠	〃	〃	山木九兵衛	一〇一―三		大東急・実践	
欠	けんじあほしをり	〃	〔平屋平兵衛〕	〔二九〕		東洋	〔二九〕の奥書があるが、本文は土佐據。
欠	〃	〃	吉文字屋清兵衛	九七―二		東博	
欠	〃	〃	谷村清兵衛	一〇七		信多	
あほし折	〃	〃	山木九兵衛	一〇一―一		芸大	十一―1・2・3と同版であるが、板心・板外だけが異なる。
欠	あほしをり	〃	象牙屋三郎兵衛	集覧になし		抱谷・東大国語	集覧〔三六―四〕から竹本筑後據を削除。
欠	源氏あほしおり	〃	八文字屋八左衛門	一一二		東大教養研	
欠	〃	〃	京 菊屋七郎兵衛	一〇五―三		抱谷	
欠	あほしおり	〃	不明	欠		東大教養研	
烏帽子折	〔源氏あほしをり〕	〃	八文字屋八左衛門			森修	
不明	〔源氏烏帽子折〕	〃	鶴屋喜右衛門	不明			他の土佐據正本に比して詞章に異同がある。信多純一「山本角太夫について」(古典文学研究)に紹介。高橋宏「近松と山本角太夫」(演劇史研究)にあげられている。

* 同版を「」でくくった。ただし、板心・板外の相違は問わない。外題は原題簽によった。推定によるものは「」内に記した。
〔略号〕全集―近松全集。他は諸版の項参照。

二「ゑぼし折」の展開

「ゑぼし折」の展開の状況を所属太夫別に考えてみる。

1 義太夫正本の内容

義太夫正本「ゑぼし折」の内容は次のようである。

〔第一〕 平清盛は源義朝を討取った長田庄司を伴って院参し、法皇の御感にあずかる。清盛の意を受けた長田親子は、院宣にそむいて常盤御前と三歳の牛若を捕える。

源氏の旧臣藤九郎盛長と渋谷金王丸は義朝の墓所で出会い、常盤母子が打ち殺されようとするところを助ける。

〔第二〕 常盤は今若・乙若・牛若を連れ、清盛の追手をのがれて雪の大和路を落ちていく（ときは御ぜん道行）。

伏見の里に行き暮れた常盤母子は盛長の妹白妙に一夜の宿を求めるが、白妙は夫弥平兵衛宗清の目にかからぬうちに立ち去るようすすめる。常盤が疲れと寒気のために軒下に倒れ伏してしまうので、子供たちは着ているものをぬいで母に着せて介抱する。立ち帰った宗清は常盤親子の情にうたれ、妻白妙の心をも思いやって母子を逃がす。

〔第三〕 牛若は烏帽子屋五郎太夫の許に烏帽子を求めにくる。五郎太夫は牛若と見破って平家方へ訴えに急ぐ。牛若に恋した五郎太夫の娘東雲は、数多の烏帽子をかけ並べ、源氏の一族郎等が祝儀に馳せ参じた体に擬して前途を祝う（ゑぼし折名づくし）。

牛若を討とうと駆けつけた長田庄司がかけ並べられた烏帽子を源氏方の加勢と思って躊躇するところを、来合させた金王丸が捕える。

〔第四〕 平家から暇を取った宗清は、牛若の討手の追跡を妨げる。牛若は東雲と白妙を伴って江州土山まで落ちのび、追いかけてきた討手を追い散らす。

〔第五〕 配所の頼朝はひそかに平家追討の企てを進め、金王丸は長田庄司を引立てて参上し、頼朝の面前で首を刎ねる。

牛若は白妙・東雲を従えて伊勢に参宮し、源氏の武運を祈願する（はしらごよみ）。

藤九郎盛長は頼朝の命を受け、関東勢を引き具して義経を迎えにくる。三社の神が現れ、源氏の末を守らんとした神託がある。

本曲は『近松全集』の解題にもふれられているように、五段めの神宮参拝の条に

神風や、伊勢の宮居は去年の秋御せんぐうなる新殿に、ことしかくやく春の日の丸木柱に、かやのやねとあり、同じく五段めの「はしらごよみ」の冒頭に

抑ことしは何事も、心にかのえむまのとし、

と、庚午の年すなわち元禄三年の暦を読み込んでいることから、元禄三年正月の興行と考えられる。

伊勢では元禄二年九月十日に内宮遷宮、同十三日に外宮遷宮が行われ、広く人々の耳目を集めたのであった。その年、大坂では大和屋甚兵衛座で岩井半四郎が伊勢の御遷宮を演じて評判をとっている。『岩井半四郎さいご物語』には次のようにある。

みの年当地にて、大和屋甚兵衛座本のととき、三百両のきう銀とつてなにはにくだり、いせ御せんぐうにめをおどろかせ、

評判をあつめた社会的行事のあて込みは浄瑠璃では古くから行われていた手法である。本曲でも去年の伊勢の御遷宮に言い及び、新春の日に輝く伊勢の新しい宮居を語ってきかせどころとしているのである。そして、本曲中の「はしらごよみ」では、庚午の年（元禄三年）の恵方からはじめて、初庚申・彼岸・月蝕・春の土用・八十八夜・夏至・半夏至・土用・二百十日・十六夜の月蝕・冬至・寒の入・事始などを順を追って説明している。伊勢参宮の牛若に八人の女官が伊勢暦を語ってきかせるのである。源氏の大將と仰がれるべき牛若の前途を祝して、その年の方角・日取りの善悪を聞かせるのは、年頭の祝賀と牛若の前途に対する祝賀とが重なって、正月興行としては時宜にかなったものと解される。

この「はしらごよみ」の節事は「ゑぼし折」の曲尾につけられている。元禄三年正月の興行としては観客に歓迎されるあてこみであるが、その年だけにあてはまるものであって、そのままでは再演することのできないものである。この箇所は、再演時の筑後掾正本では「牛若宮めぐり」にあらためられることになる。さらに、土佐掾正本では「はしらごよみ」だけでなく五段め全体を改作することになるのである。

2 筑後掾正本における改訂の意味

筑後掾正本「ゑぼし折」は筑後掾受領後の「ゑぼし折」再演時のものである。

筑後掾の「ゑぼし折」再演の時期については明確ではない。筑後掾正本の祖本八行五十二丁本（岡山本板）の奥書に竹本筑後掾とあるので、筑後掾受領後の刊行であることは明らかである。筑後掾受領は元禄十一年頃と考えられる。⁽⁶⁾したがって、筑後掾による「ゑぼし折」再演は元禄十一年以後と考えるとよいであろう。『外題年鑑』明和版に、「ゑぼ

し折」(同書では「源氏烏帽子折」とある)の上演について、「二度目 元禄十二年卯年正月二日」とある。『外題年鑑』が本曲の上演を元禄十二年正月とする根拠は明らかではないが、あるいは、筑後掾による再演の時を示したものかとも考えられる。筑後掾受領の翌年であること、「源氏烏帽子折」という題名が初演時のものではないことなど、『外題年鑑』の記す元禄十二年正月を筑後掾による再演時を指すものと解すると辻褄があうようである。

筑後掾正本は義太夫正本の板木を利用し、五段めの「はしらごよみ」の箇所だけを「牛若宮めぐり」の節事に改刻して刊行したものである。これは次の二点によって明らかである。

1 八行五十二丁筑後掾正本初丁表を『近松全集』掲載の義太夫正本の写真に比べると同版である。したがって、八行本筑後掾正本は八行本義太夫正本の板木を用いたものと考えられる。

2 筑後掾正本は「牛若宮めぐり」の四丁分にだけ板外がない。これは、この箇所だけが改刻されたためである。

筑後掾の再演時にこのような改訂が行われた理由については、すでに諸家による指摘がある通り、義太夫のあてこみであった「はしらごよみ」が元禄三年の恵方を披露したものであったので、再演時においては全く無意味になったためであろう。

「牛若宮めぐり」は加賀掾の「三社詫宣由来」の景事「二位中將宮めぐり」をそのまま使っている。「二位中將宮めぐり」は加賀掾段物集「竹子集」(延宝六年八月刊)に「宮めぐり」として収められている。広く人々に親しまれていたものと思われる。筑後掾は「ゑぼし折」の再演に当って、これをそのままとり込んで使ったのである。ただ、「ゑぼし折」では登場人物が異なるので、冒頭に

扨其後に、二るの中將まさひと公、てる日のまへをいざなひさも花やかにてさんぐう有、
(三社詫宣由来)

とあるところを

是は扱をき、御さうし牛若は、しのゝめをいざなひさも花やかにてさんぐう有、

(ゑぼし折)

として、牛若がしのゝめを伴って伊勢の宮めぐりをすることに改めているのである。

冒頭を除いては、「牛若宮めぐり」の詞章は「二位の中將宮めぐり」の詞章に全く同じである。詞章ばかりでなく節付けもほとんど同じである。竹本義太夫は修業時代に加賀掾に学んだことはあるが、義太夫節は嘉太夫節とは違ったものであったことはいうまでもない。この箇所が、詞章のみならず節付けまで酷似しているのは、版元の出版作業の上で加賀掾正本「三社託宣由来」の「二位の中將宮めぐり」の箇所が参照されたためと解すべきであろう。筑後掾正本「ゑぼし折」の祖本八行五十二丁「ゑぼし折」を版行した書肆山本は「三社託宣由来」八行四十四丁本も版行している。⁽⁷⁾「宮めぐり」の掲載されている「竹子集」も山本九衛板である。山本が「ゑぼし折」を筑後掾正本として売り出すとき、大半は初版の義太夫正本に拠り、曲尾の不都合な箇所だけを加賀掾正本から得たものと考えることができる。このように考えると、「ゑぼし折」の改訂は、書肆によって版行の都合にあわせて行われたことになりかねない。しかし、やはりそれは筑後掾再演の際の思いつきであったものを、稽古本刊行の忽忽の作業の中で行われたものと解すべきであろう。⁽⁸⁾

筑後掾正本の「ゑぼし折」の改訂は、「ゑぼし折」と「三社託宣由来」とが同一作者であったことを考えさせる有力な手がかりともなるであろう。各太夫間に詞章の流用が自由に行われてきた浄瑠璃界の実状では、両作の節事の利用だけによって作者を確定することは危険ではあるが、同一作者の作であることが、前作の部分的なはめ込みによる改訂を容易に実現させることになったと考えることはできるであろう。「三社託宣由来」は近松存疑作として扱われてきた作である。両作とともに近松作とする方向性が認められると思う。

3 土佐掾正本の位相

土佐掾正本「ゑぼし折」には原題簽の外題の下に「山本土佐掾直伝」と記されている十行二十五丁本（菱屋板・山木板）がある。他の原題簽を欠く正本も、原装ではこのような形式の題簽が貼付されていたものと判断される。また、土佐掾正本の奥書は太夫の名のない形が普通であるが、ただ一本、十行三十丁本（吉文字屋板）に、山本土佐掾と記されている。

山本角太夫は山本相模掾を受領し、後に土佐掾と改名したのであるが、土佐掾改名の時については明確ではない。信多氏の指摘にあるように、⁽⁹⁾貞享三年九月以降と考えるならば、「ゑぼし折」初演時元禄三年にはすでに土佐掾と名乗っていたことになる。したがって、土佐掾正本が初演時にあったとしても時間的には矛盾しないので、土佐掾正本であることが直ちに義太夫正本を踏襲したことにはならないはずである。義太夫正本と土佐掾正本の先後関係を決めることは、他の要件によらなければならないようである。

次に両者の内容をみながら先後関係を考えてみよう。

まず土佐掾による大きな改変は義太夫正本（筑後掾正本）の五段め全体を改作したことである。土佐掾正本の五段めの内容は次のようである。

牛若は奥州に下り秀平に対面する。秀平の命によって、諸大名は義経出陣の御祝儀を持って参上する。いづみの

三郎はそれの一つ一つ記録する（節事）。

秀平は義経に軍のたてようを語ってきかせる。

義太夫正本（筑後掾正本）五段めの冒頭は、法体となった土佐坊昌俊（金王丸）が、頼朝の御前に義朝を殺した長

田庄司を引き出し、頼朝より長刀を賜わって首をかき落す場面からはじまる。これは、三段めの結末で、土佐坊昌俊が長年探していた長田庄司をとりおさえながら、

今ころすはあったら物関東へつれ下り、頼朝の御前にてなぶりごろしにすべし

と言って、その場では殺さず、高手小手にいましめて牛若と別れる場面に対応しているのである。義朝の敵長田庄司の結着をつけることは「ゑぼし折」の脚色の上では重要である。土佐掾正本では長田庄司を生捕ったまま、その結着は放置されてしまうことになっている。「追付参らん」と言って牛若と別れた土佐坊は、土佐掾正本では再び登場することなく終わってしまっている。「ゑぼし折」の前半で進めてきた劇的展開を放擲し、そのかわりに、五十四郡の大名の献上品揃えや秀平の兵法談を節事にして結末とすることになっているのである。これは信多氏も言われるように、首尾一貫した原作の無自覚な改訂というべきであろう。⁽¹⁰⁾

義太夫正本の詞章を踏襲した一段め、四段めの詞章をみると、土佐掾正本には各所に省略が行われている。とりわけ、四段めの後半には大幅な省略がみられる。例えば次のような箇所省略がある。

① 義太夫正本「討残される兵共おめいてかゝれば牛若丸」から「弓手馬手へぞさばける」まで、約一丁半分が省略されている。

これは、頼方が牛若に攻めかけ、牛若は飛鳥の如く飛びはねながら雷玄の真向をしたたかに切り落すという場面である。土佐掾正本はこれを省略したために、「大將頼方いかりをなし」への続き方が不自然となり、頼方の怒る様の迫力が失われている。

② 義太夫正本では雷玄を相手にしての東雲による女武道が詳しく述べられている。土佐掾正本ではこれを簡潔にしている。

義太夫正本の「しのゝめ長刀むねになし、とびくる石をはら／＼はらり／＼きりはらひ八方に打はらへば身にはあたらずとびかへり」と東雲の活躍を見せる場面は、土佐掾正本では、ただ、「てつぼうをつ取打てかゝるを。ひらりとばしちやうど切。むざんやならいげんは二つに成てぞうせにける。」とあるだけである。

土佐掾正本には、四段め以外にも義太夫正本の表現を簡略にした箇所が各所にある。例えば次のような表現である。
○すゑを大事に思はずはをのれと爰でしぬべきに、命が二つほしいな、ヲ、我も源氏の御末をみつぐもの、有ならば、

御ぶんと爰でしぬべきに、命が も一つ命がほしいな、

(一段め)

(右側＝義太夫正本 左側＝土佐掾正本 用字の相違は問はない。以下これに同じ。)

○渋谷の金王昌俊獅子王の力を出しゑいや、／＼とねぢあへば うでばねひざばね腰のほね、つがひ／＼はから紅ち

ばしつてふしあがり、

(一段め)

このように、土佐掾正本の詞章には省略の手法が顕著にみられるのである。これは義太夫正本の詞章が基になっていると考えるべきで、逆に、義太夫正本が土佐掾正本を増補したと考えるのは無理である。省略の手法は、稽古本を絵入本にする場合にもよくみられることで、先行作に手を入れる場合の常套的な方法である。

また、土佐掾正本では部分的に加筆している箇所も指摘することができる。それは、義太夫正本の語りものとしての調子に、説明的な語句を付加し、会話調を強める傾向を示している。二・三の例をあげてみる。

○けふよりさやうのわるさせば、コレ、母が子にてはなきぞとよ つめ／＼するぞとたいじよだて

(一段め)

○そとばにむかひ申やう。ゑゝ 口おしの御有さまや、

(二段め)

○今一言いふてみよと太刀に手をかけいひければ、ヤア、あゝはおせきやるな藤九郎 侍とは人がまし、

(二段め)

このような会話の部分の説明的な加筆は、土佐掾正本が、義太夫正本の詞章をより分かりやすくしようとしたため

に行われたものと解される。

さらに、土佐掾正本には、詞章がかえられたために生き生きとした表現が失なわれて、観念的な表現になった箇所がある。

○三人ひてうの身もかく飛こへ、はねこへおどりこへ 火花を み、だして ちらして へたゝかひける (四段め)

これは、天狗の弟子牛若と白妙・東雲が八十余人の追手を飛鳥の如くかわしつつ戦う場面である。その有様を義太夫正本では「花をみだして」と表現している。これを土佐掾正本では、古浄瑠璃以来の常套表現「火花をちらしてたゝかひける」としているのである。躍動的な表現から観念的な説明になっているということができよう。

以上列挙した義太夫正本と土佐掾正本の相違は、何れも土佐掾正本が義太夫正本を踏襲して改訂を加えたものであることを裏づけるものと考えることができるのである。

なお、土佐掾正本中、「諸版十四」(十行三十二丁本)は特殊な版である。内題は他の土佐掾正本と違って「ゑぼしおり」とあり、二段めの冒頭は、これだけが「かくてそのゝち」となっている。全体的には土佐掾正本と同じであるが、細部においては義太夫正本に近い詞章も見られる。奥書のない破本なので、その性格を明確にすることはできないが、土佐掾による「ゑぼし折」改作の一段階を示すもののようにも思われる。

土佐掾正本の改作の模様を、義太夫正本との相違という観点から考えてみた。土佐掾正本が義太夫正本に先行するという説の当否を検討する必要からである。以上の考察から、土佐掾正本は筑後掾正本より後のものであることは明らかになったと思う。土佐掾正本の義太夫正本との相異はそのまま筑後掾正本との相違に通じている。土佐掾正本の改変・省略・加筆などの作業は、筑後掾正本を踏襲しつつ行われたものと解すべきであろう。土佐掾正本の示してい

る特色は、明らかに土佐掾正本が筑後掾正本よりも新しい浄瑠璃の様相を示していると思われるのである。

むすび

「ゑぼし折」諸版の系列は次のようにまとめることができる。

1 「ゑぼし折」の初演は元禄三年正月で、この初演時の正本は山本九兵衛板八行五十四丁竹本義太夫正本である。これが「ゑぼし折」の祖本である。

2 山本九兵衛・山本九右衛門板八行五十二丁本「ゑぼし折」は竹本筑後掾による再演時のもので、全体は義太夫正本の板木を使用し、第五の節事「みやめぐり」の二丁分だけを改刻している。

3 土佐掾正本は内容的には筑後掾正本によりながら、全面的に改刻している。

イ 各段の冒頭に古浄瑠璃の形式句を置いている。

ロ 五段め全体を改めている。

ハ 一段め、四段めは詞章に手を加えている。特に部分的な省略が多く、説明的な語句の付加も行っている。

ニ 節付けは土佐掾の節に改めている。

4 「ゑぼし折」の諸版の外題はすべて例外なく「ゑぼし折」である。したがって、本曲の通称は「ゑぼし折」であったと考えられる。

5 「源氏ゑぼしをり」という題名は諸版の内題につけられているもので、絵入義太夫正本から見えている。幸若や謡曲の「烏帽子折」との区別を明確にするために用いられたものと思われる。

6 筑後掾正本のうち、八行本と七行本の内題は「烏帽子折（ゑぼし折）」であるが、他版の内題はすべて「げんじゑ

ぼしをり（表記の相異は略。以下同じ）」である。土佐掾正本の内題はすべて「げんじゑぼしをり」である。したがって、外題「ゑぼし折」、内題「げんじゑぼしをり」の形式が一般的に流布した版型である。

7 奥書に近松門左衛門の名のあるものは山本九兵衛板八行五十四丁竹本義太夫正本、山本九兵衛・山本九右衛門板八行五十二丁竹本筑後掾正本、山本九兵衛・山本九右衛門板十行三十三丁竹本筑後掾正本の三種である。山本板の正本、とりわけ本曲の祖本となった八行本の奥書に近松の名があることは作者を近松作とする一つの証拠である。

浄瑠璃「ゑぼし折」の内容は幸若や謡曲の「烏帽子折」とは著しく異っている。幸若や謡曲では、牛若は吉次に従って東下りをする途中、左折の烏帽子をあつらえ、烏帽子屋の亭主を烏帽子親として元服し、烏帽子の代物として源氏重宝の刀を与えて去る。烏帽子屋の妻は鎌田正清の妹で、この刀の持主は源氏の御曹子牛若であることを悟り、夫と共に牛若を追って刀を返す。牛若は吉次を襲ってきた盗賊熊坂長範を滅ぼして武勇のことはじめとするという内容である。

浄瑠璃「ゑぼし折」では、牛若が左折の烏帽子をあつらえて元服するという発想を幸若や謡曲の「烏帽子折」に仰いでいる。しかし、幸若や謡曲の重要な場面となっている熊坂長範退治の件は扱われていない。幸若や謡曲で活躍する烏帽子屋とその妻正清の妹とは、浄瑠璃では平家方の武士弥七兵衛宗清とその妻藤九郎盛長の妹白妙に発展し、別に烏帽子屋とその娘東雲^{しののめ}を登場させて複雑な劇的展開をみせている。

「ゑぼし折」二段めで、伏見の里に行き暮れた常盤親子を、妻の苦衷を察した宗清が見逃してやる件りは劇的感動を呼んだ場面で、新内「明烏」の原拠となり、広く人々に親しまれている。また、「ゑぼし折」で牛若を助けた宗清の後日の姿は、義経が平家の若君敦盛を唐櫃に入れて宗清に渡し、往年の恩義に報いる場面となって「二谷嫩軍記」の「熊

谷陣屋の段」に脚色され、浄瑠璃や歌舞伎の名場面として、くり返し上演されることになる。

「ゑぼし折」は、その題材が人々の愛憐を集めていた源氏の御曹子牛若の元服を扱ったものであったことと、曲中に深い劇的感動を誘う場面を持っていたことによって人気を博し、浄瑠璃史上稀に見る程の多くの異版の出版を重ねたのである。

注

(1) 「源氏烏帽子折」について「版式の異なるものは校訂者の見た範囲だけでも通じて七種に及ぶ。」とあるが、具体的な説明はない。

(2) 高橋宏「近松と山本角太夫」(『演劇史研究Ⅰ元禄劇篇』〈昭和11 京橋巧芸社〉所収)。この論文には次の九種の異本があげられている。

一 源氏ゑぼしをり 十行廿五丁本、山本九兵衛版、山本角太夫正本。

二 げんじゑぼしをり 十行二十四丁、山本角太夫正本。

三 源氏ゑぼし折 十行二十四丁、山本角太夫正本。

四 烏帽子折 八行五十四丁、山本九兵衛版、元禄三年興行、竹本義太夫正本近松全集所収。

五 源氏烏帽子折 十行三十五丁本、鶴屋喜門版、山本土佐掾直之正本。

六 源氏烏帽子折 十行三十一丁本、竹本筑後掾正本。

七 源氏烏帽子折 八行四十丁本、竹本筑後掾正本。

八 源氏烏帽子折 七行七十二丁本、竹本筑後掾正本。

九 源氏烏帽子折 絵入、十四行十五丁本、宝永七年亀屋版。

(3) 大森北義「『源氏烏帽子折』略解 並に 翻刻」(『南日本文化』一四号 昭和56年7月)。

(4) 『正本近松全集』第一卷(勉誠社 昭和52)「佐々木大鑑」拙稿解題参照。

(5) 同右

(6) 竹本筑後掾受領は従来元禄十四年五月とされてきたが、最近の研究によって、元禄十一年正月まで引き上げられることは確実となった(『義太夫年表』近世篇〈延宝—天明〉参照)。

(7) 宇治加賀掾正本八行四十四丁「三社託宣由来(仮題)」山本九兵衛板(早稲田大学演劇博物館蔵)。ほかに、山本九兵衛板絵入十七行十六丁半「三社託宣由来」宇治加賀掾正本(パリ国立図書館蔵)もある。

(8) 筑後掾は「宮めぐり」を加賀掾の節で語ったとは考えられない。詞章は借りても、その節は義太夫節で語ったのであろう。筑後掾正本に加賀掾の節がそのままつけられているのは、版元が以前に出版した「三社託宣由来」の版を参照したためと考えられる。

(9) 信多純一「山本角太夫について」(古典文庫『古浄瑠璃集 角太夫正本(二)』)

(10) 信多氏の注8掲出論文では、この箇所について

これは大きな誤りであり、無理な改変を行って、首尾を整えることを忘れた結果と考えざるを得ない。
とある。

(付記) 浄瑠璃の段数の表記は、正本では第一〜第五とあるが、論説中では分かりやすくするために一段め〜五段めと記すことにした。「ゑぼし折」の引用文は左記のようである。

○ゑぼし折(義太夫正本)……『近松全集』第三卷(朝日新聞社 大正十四年)

○ゑぼし折(土佐掾正本)……菱屋治兵衛板十行二十五丁本

○三社託宣由来……『近松全集』第一卷(朝日新聞社 大正十四年)所収「三社託宣」